



日本植物病理学会ニュース 第99号

(2022年8月)

【新名誉会員・新永年会員の略歴とお話】

名誉会員 大木 理



1951年4月横浜市生まれ。1974年3月東京大学農学部農業生物学科卒業。1979年3月同農学系研究科農業生物学専攻博士課程修了、「日本産萎黄型植物ウイルスに関する研究」で農学博士。日本学術振興会奨励研究員を経て、同年7月大阪府立大学農学部助手。1984年4月から85年10月までアルバータ大学客員研究員。その後、講師、助教授を経て2001年4月農学生命科学研究科教授。2005年4月公立大学法人大阪府立大学生命環境科学研究科教授。2013年4月生命環境科学域長。2017年3月定年退職、名誉教授。

学会では、評議員、関西西部会長、原著編集委員、病名委員、植物ウイルス分類委員会委員・委員長、大会委員長、植物ウイルス病研究会会長などを、また、International Committee on Taxonomy of Viruses 委員などを務めた。2010年には「キュウリモザイクウイルスの感染動態に関する研究」で学会賞を受賞した。

著書は、原色作物ウイルス病事典、植物病理学事典、植物保護の事典、日本植物病害大辞典、Virus Taxonomy. Eighth Report of the International Committee on Taxonomy of Viruses、植物ウイルス大事典など（いずれも共著）のほか、実験書として、植物ウイルス同定の基礎など、大学教科書として、植物病理学、微生物学を、一般向け読み物として、植物と病気（いずれも単著）を上梓した。

東京大学の学部・大学院では、ファイトプラズマ発見後に残された節部局在性ウイルスの電顕観察による解析と分類を行った。大阪府立大学着任後は多様な作物のウイルス病原の同定と分類、検出・診断法などの研究を行った。その後、キュウリモザイクウイルス（CMV）の多数の系統

と人工変異株を用い、分子生物学的技法と形態観察とを併用して、感染植物におけるウイルスの長距離移行経路と移行阻害、病徴発現に関わる要因を、さらに宿主によるRNAサイレンシングとの関係を明らかにした。従来はウイルスが侵入できないと考えられてきた茎頂組織にCMVが感染し、組織が宿主のRNAサイレンシングによってウイルス感染から回復することを明らかにしたことは大きな成果である。これまでにご指導、ご協力いただいた先輩、同僚、多くの学生の皆様に改めて感謝申し上げる。

植物病理学は農業という現場を支える重要な応用科学であるが、同時に広範な植物科学を支える基礎科学でもある。日本植物病理学会のますますの発展とともに、研究成果がこれまで以上に社会に広く還元されることを祈りたい。

名誉会員 難波成任



1951年東京都生まれ、1977年東京大学農学部卒業、1982年同大学大学院農学系研究科修士・博士課程修了後、日本学術振興会奨励研究員、1985年東京大学農学部助手、1992年同助教授、1995年同教授、1999年同大学大学院新領域創成科学研究科教授、2004年同学大学院農学生命科学研究科教授を経て、

2017年東京大学名誉教授・特任教授、現在に至る。この間、1989年米国コーネル大学客員研究員、農林水産省招聘研究員、文部省学術国際局学術調査官、東京大学総長補佐、法政大学特任教授、同総長特任補佐を歴任。現在、(一社)日本植物医科学協会代表理事、米国微生物アカデミー会員。

研究歴：学部4年生の時より一貫して植物ウイルスに関する研究を行った。学位取得後は、助手になるまで分子遺伝学的研究手法の基盤を構築した。米国留学時には、遺伝子組換え植物の研究に取り組み、今では常法となっている

Nicotiana benthamiana の形質転換技術を確立した。帰国後は、植物ウイルスとファイトプラズマ研究に取り組んだ。

①植物のウイルス抵抗性遺伝子と抵抗性誘導機構に関する研究：これまでにない広域抵抗性を示す、優性および劣性抵抗性遺伝子 JAX1 や EXA1 を発見した。また、ウイルス感染による植物の全身壊死症状が、ウイルスに対する過敏細胞死の連鎖反応であることを明らかにした。さらに、植物の RNA 干渉における、サイレンシングサプレッサータンパク質の新たな作用メカニズムを明らかにした。これら一連の研究により、ウイルス抵抗性誘導機構とその抑制機構のダイナミズムの統合的理解に貢献した。

②ファイトプラズマに関する研究：発見後四半世紀にわたって研究の遅滞していたマイコプラズマ様微生物 (MLO) に分子のメスを入れ、リボソーム遺伝子に基づいた系統解析を導入して分類基準の確立に貢献し、それまで世界で 1,000 種類以上あった MLO を約 50 種に整理した。また、MLO とマイコプラズマは系統学的にも翻訳システムにおいても異なることを発見し、MLO を「ファイトプラズマ」と改称した。さらに、世界に先駆け全ゲノムを解読し、ファイトプラズマが退行的進化を遂げた生物で、核酸・アミノ酸合成・エネルギー合成まで宿主に依存していることを明らかにした。この成果をもとに、ファイトプラズマゲノムのマイクロアレイを開発し、全遺伝子のうち 1/3 を植物体内と媒介昆虫体内で使い分けて発現していることを解明した。そして、動植物病原微生物を通じて初めて病原細菌が特定の昆虫により伝搬される仕組みが、菌体表面を覆う膜タンパク質と昆虫の細胞骨格タンパク質との結合の可否で決まることを解明した。また、ファイトプラズマが植物に引き起こす特徴的なてんぐ巣病の原因遺伝子「tengu」と葉化病の原因遺伝子「phyllogen」を突き止め、その機能発現メカニズムを解明し、ファイトプラズマ学の構築と体系化に貢献した。

③植物医科学分野の創設とその社会展開：以上の研究成果に基づいて、植物病の診断・治療・防除・予防など、臨床技術開発と社会展開を目指す新たな学術領域「植物医科学」を提唱し、教科書を著した。植物医科学研究室 (2006 年～現在) や植物病院 (2008 年～現在) を東京大学に設置し、(社) 日本植物医科学協会を設立し、2004 年に創設された国家資格技術士 (植物保護分野) の合格者が資格取得できる植物医師認定審査を 2015 年より開始した。現在登録植物医師は 100 名を超え、他大学に植物医科学専修を擁する生命科学部設置に携わるなど、植

物医科学の社会実装を進めた。この過程で、国により特定重要病害に指定されているプラムポックスウイルス (和名：ウメ輪紋ウイルス) やジャガイモ基腐病菌の国内侵入を発見し、これらのほかファイトプラズマなどの高感度・迅速・簡易・安価な診断キットを多数開発・製品化した。さらに、微生物のゲノム情報に基づき特定の微生物のみを生育させる選択培地設計アルゴリズム「SMART 法」を考案し、様々な植物病原菌に対する選択培地を開発・製品化した。

学会活動：会長・副会長、庶務幹事長、評議員、常任評議員、創立百周年記念事業準備・運営・実行委員長。日本マイコプラズマ学会評議員・理事・副理事長。日本農学会常任・運営委員。国際マイコプラズマ学会常務理事・賞選考委員長。国際植物病理学会評議員。農林水産技術会議委員。財務省独法評価委員会部会長など。

受賞・受章：学術奨励賞、学会賞。このほか、日本マイコプラズマ学会北本賞、国際マイコプラズマ学会エミー・クラインバーガー・ノーベル賞、紫綬褒章、日本農学賞、読売農学賞、日本学士院賞。

著書：植物ウイルスの分子生物学、植物病理学、創造する破壊者ファイトプラズマ、植物医科学など。

最後に、これまでご指導ご鞭撻を頂いた、研究室や学会の先生方の諸先輩、また、研究を共同で行ってくれた多くの教え子たち、さらには、学会員諸氏に心より御礼申しあげると共に、今後の学会の益々の発展をお祈りいたします。

永年会員 太田 光輝



1946 年 11 月 16 日、岐阜県生まれ。1971 年 3 月静岡大学農学部卒業、1973 年同大学院修士課程修了、1974 年 4 月静岡県庁に採用、農業試験場勤務となる。1986 年 4 月主任研究員、1997 年 4 月柑橘試験場研究主幹、2002 年 4 月西遠分場長、2004 年 4 月農業試験場病害虫部長、2007 年 3 月定年退職。この間、

1992 年 11 月東京農業大学より農学博士 (論博) を取得。2006 年 6 月全国農業関係試験研究場所長会から「イネ・野菜・果樹の病害防除技術の開発」で表彰。

研究内容：主としてイネ、野菜、花き、果樹の植物細菌病の生態と防除に関する研究に従事。イネではもみ枯細菌病、苗立枯細菌病、野菜ではトマト青枯病、キュウリ斑点細菌病・縁枯細菌病、カンラン黒腐病・軟腐病、レタス斑

点細菌病・腐敗病，エンドウつる枯細菌病・先端黄白化症・斑点細菌病，花きではキク根頭がんしゅ病，バラ根頭がんしゅ病・毛根病，マーガレット根頭がんしゅ病，カーネーション萎凋細菌病・斑点細菌病，チューリップ黒腐病，果樹ではカンキツかいよう病，モモせん孔細菌病，オリーブがんしゅ病を対象とした。この中で，特にイネの細菌病については，種子消毒法の改良に取り組んだ。大量の種子を一度に消毒できる真空浸漬法を開発した。野菜用の予冷施設を利用することでそれが可能なことも示した。花き類の根頭がんしゅ病・毛根病については，病原細菌の詳しい生理的性質を明らかにするとともに，わが国では生理型1と2の系統が多く分布し，その病原性の基になっているプラスミドDNAを明らかにした。また，本病の防除法に抵抗性台木が有効なことも本邦で初めて明らかにした。カンキツかいよう病については，県内でA, B, C型3つの菌の系統が存在し，カンキツの種類やその生存方法により系統分化が進んでいることを明らかにした。雑草，特にシバにおける腐生の生存は新発見であった。

第2の人生：県を退職後，1年間JICAのSVとしてタイのラチャモンコン大学で教鞭を執った。帰国後の10年間は県内の農薬卸会社日星石油で農薬の安全使用業務に携わるとともに，県の農林大学校で植物病理学の講義と実習を担当した（非常勤講師）。お陰で50年以上も植物病理学会と関わる事ができ，永年会員の推挙までいただくことができた。

これもこれまで研究をご指導いただいた大学の先生方や職場の先輩方，調査研究をと同行った同僚のお陰と厚くお礼申し上げますとともに，本学会のますますの発展をお祈りいたします。

永年会員 尾崎 政春



1947年2月北海道生まれ，1965年倶知安農業高校卒業，同年4月北海道立根釧農業試験場。発生予察事業に従事するとともにジャガイモ病害に対する新規薬剤の効果査定などを担当。メタラキシル剤が難防除であったジャガイモ塊茎疫病に卓効を示すことを確認し，その使用法を確立，オーチャードグラス雪腐大粒菌核病の発生多寡を左右するのは根雪前の低温と根雪期間であることを突き止め，ジャガイモ黒あざ病の生態解明の成果が北海道大学名誉教授宇井格生博士の退官記念出版「北海道畑作物の

土壌病害」に登載されたのは，この上ない喜びであった。1978年北海道立中央農業試験場病虫部，製麺適性が高いコムギの新品種「チホクコムギ」に特異的に多発した条斑病の緊急対策研究チームの一員として作付け体系の適正化による土壌中の病原菌数制御を担当，成果が役立ち道産コムギの評価向上に貢献。1989年北海道立上川農業試験場専門技術員（病害虫），地域で活躍する農業改良普及員や農協職員と連携し地域課題解決に向け生産現場で活動。1994年1月「北海道におけるコムギ条斑病の発生生態と防除に関する研究」で東京農業大学より博士（農学）の学位を授与。

2000年北海道立中央農業試験場クリーン農業部長。各農試のクリーン農業関連課題を統括，道庁および関係農業団体とYES!clean表示制度発足への協議に参画，この頃，道産春コムギ全粒粉の市販品から高濃度のデオキシニバレノールが検出されたとの情報を入手，秘匿下で関係先との情報共有を図り対策プロジェクトチーム結成，3年後には関係する研究員の総力で当面の対策を開発し普及，2002年に公表された暫定基準値を全道的にクリアし今日まで問題なく経過中。2003年北海道立十勝農業試験場長，北海道の農業産出額の30%近くを占める十勝は若いころの憧れの地，2006年これまで支えて下さった多くの方々に感謝しつつこの地で定年退職。末筆ながら永年会員への推挙に感謝するとともに，年々厳しさを増す農業生産現場への変わらぬ支援を期待します。

永年会員 金子 俊彦



1947年1月台湾台北市生。1969年3月大阪府立大学農学部植物病理学研究室を卒業，同年4月クミアイ化学工業に入社，1979年5月にサンド薬品に転職，1986年に会社都合でエスディエス・バイオテックに転職，続いて同様に会社都合で1998年にノバルティス・アグロに転職，2001年にノバルティス・アグロをリストラされ，2年間就職活動し，2003年に人材会社に入社するも9ヶ月で解雇，その後2004年に最初のクミアイ化学工業に出戻り63歳まで働かせてもらいました。その後は，2019年（73歳）まで緑の安全推進協会の派遣講師をクミアイ化学工業の嘱託として働きました。

学会活動に寄与した点とあえて言うとしたら，日本（京都）で国際病理学会が開かれた時，理化学研究所の先

生方が、農薬会社に寄付を募っておられ、当時農薬会社としては名の通っていなかったサンド薬品が早い時期に上司の許可のもと寄付をしたことが、他社からの寄付を貰いやすくしたと、後から理研の先生方からお聞きしました。

いもち病の特効薬として登場したイーライリリーの商品名“ビーム”の開発をイーライリリー、武田薬品、クミアイ化学工業の3社で開発登録にかかわりました。特に、試験を行った最初の年は、いもち病の大発生で、箱処理をしたビームが素晴らしい効果を示したことが、強く印象に残っています。当時の日植防の堀先生の号令の下、翌年から特別研究試験が実施されることになったのです。また、サンド薬品で、チバガイギーの商品名“リドミル”と同等品、商品名“サンドファン”を後追いで開発したにもかかわらず、登録は同時と云う快挙を達成したことは、植物病理関係の業界で貢献したことだと思います。これら2剤の製品のおかげで、農薬業界で働く私が、北は北海道から、南は鹿児島までの大学の植物病理の先生方の既知を得たことが大きかったと思われます。

本学会のますますのご発展を祈念致します。

永年会員 牧野 孝宏



1947年静岡県生まれ。1969年静岡大学農学部卒業。静岡県行政職および防除所勤務。1982年農業試験場に移動し、病害虫部、企画経営部、プロジェクトチームに所属した。植物病理関連の仕事は、主として試験場所属の12年間に実施した。2007年退職後、浜松ホトニクス、トヨタが中心となって設立した光

産業創成大学院大学特任教授として勤務した。その後、住友化学にお世話になり、水稻の育種、栽培関連の仕事に従事した。

主な研究活動は、生物防除の実用化に関する研究とバイオフォトンに関する研究である。生物防除法の開発では、Kerr教授から直接菌株を戴き、県内農薬メーカーとともに高濃度製剤を開発した。*Agrobacterium radiobacter* K84製剤は、バラ等の根頭癌腫病に高い効果を示して農薬登録された。また、プロジェクトチームを組み、県内にある農薬メーカーとともにイネの馬鹿苗病防除剤として、農薬並みに効果が高い *Trichoderma atroviride* SKT-1製剤を開発した。農薬登録され、現在も使われている。

一方、基礎的で実用的な研究を地元の光学メーカーと進

めた。超高感度光電子増倍管を用いて植物が防御応答時に発するバイオフォトンの利用法を開発し、抵抗性誘導農薬の選抜への適用を進めた（特開2012-001443）。

学会活動としては、関西部会開催時のお手伝いやバイオコントロール研究会のお手伝いなどであり、申し訳なく思っております。

このたびは、永年会員に推挙いただき誠に有り難く存じております。これまで御指導いただいた諸先生方、調査研究を共に行った同僚に深く感謝申し上げるとともに、本学会のますますの発展をお祈りいたします。

【学会活動状況】

第31回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム報告

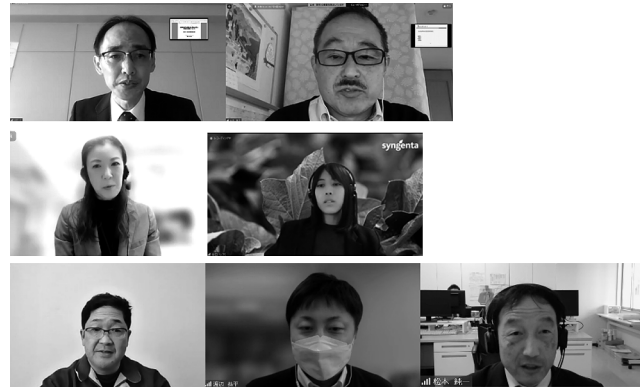
第31回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、前回同様新型コロナウイルスの状況を勘案しオンラインでの開催となったが、植物病理学会幹事の東京農業大学キム先生や昨年に引き続きホスト局としての機能を引き受けて頂いた日本植物防疫協会より多大なご協力を賜り、2022年3月30日に無事開催することができた。手軽に聴講できることもあり、公的機関、大学、農薬メーカーおよび農業団体などから200名近い方々に参加いただき、またチャット機能を用いて質疑も活発に行われ盛会となった。また、本年の発表はライブにて行い、質疑もそれぞれの演題の後に設定し、より通常の進行に近い形としたが、大きなトラブルはなく無事閉会を迎えることができた。

最初の発表は、農林水産省 消費・安全局 植物防疫課の井田仁様より「薬剤抵抗性病害虫の発生状況と対策の取組について」と題して、全国の薬剤抵抗性管理の事例と薬剤抵抗性病害虫・雑草の発生状況について紹介頂き、全国での耐性菌の発生状況を知る貴重な情報を提供頂いた。また、薬剤ごとの検定方法や評価方法についての情報不足や人員不足による検定対応の困難さが指摘された。本会のHPには検定法を掲載しているが、さらなる啓発活動など本会にできる活動を行っていきたい。次に、農林害虫防除研究会常任理事、日本曹達株式会社の山本敦司様より「IPMを基盤とした薬剤抵抗性管理の実践を！」と題して、害虫研究者の観点から薬剤抵抗性管理について紹介頂いた。生産者の立場では害虫と病害の区別は無く、防除と薬剤抵抗性対策はセットであり、また薬剤抵抗性管理を踏まえた適切な防除対策を生産者へわかりやすく伝えることが肝要であるため、害虫研究者と病害研究者との連携が必要との提言があった。薬剤抵抗性管理は農業生産に携わる関係者の誰もが必要なことであり、所属の枠を超えて連携することの重要性を改めて認識させて頂いた。午前中の最後は東北

農業研究センター畑作園芸研究領域の遠端枝様より「東北地域のタマネギ腐敗性病害の病原細菌とその薬剤耐性について」と題して、東北地域を中心に発生しているタマネギりん茎の腐敗症状についての病原菌の特定と効果的な薬剤について紹介頂いた。薬剤による効果的な防除は必要だが、薬剤耐性菌の出現を回避するためにも多面的な防除対策も合わせて必要である点を示唆頂いた。

午後の1題目はシンジェンタジャパン株式会社の谷口しづく様より「新規殺菌剤ピジフルメトフェン（ミラビス®）の作用特性と感受性検定」と題して、新規SDHI剤のピジフルメトフェンについて紹介頂いた。従来のSDHI剤が不得意とする麦類赤かび病に対しても高い効果を示すことから、今後の麦類の作物生産に貢献する資材として期待される。次はダイズ紫斑病に関連した2題の発表で、宮城県古川農業試験場 作物環境部の宮野法近様より「宮城県におけるダイズ紫斑病 QoI 剤耐性菌発生状況について」と題して、宮城県内の QoI 剤耐性菌状況について紹介頂いた。生産現場での効果低下は確認されていないが、いくつかの圃場で感受性の低下が疑われる事例が確認されているため、QoI 剤に限らずモニタリングの継続と代替剤の検討を行っていくことを紹介頂いた。続いて、秋田県農業試験場生産環境部の渡辺恭平様より「秋田県におけるダイズ紫斑病の薬剤耐性菌の動向」と題して、秋田県における薬剤耐性菌の状況を紹介頂いた。QoI 剤及びベンズイミダゾール系薬剤の耐性菌が報告されたが、他に効果の高い薬剤が少ないことから種子更新率の向上と安定した健全種子の供給も合わせて必要と提言頂いた。最後の演題は、兵庫県立農林水産技術総合センター 農業技術センターの松本純一様より「イネばか苗病菌のペフラゾエートに対する感受性低下とその後の対応策」と題して、依然として多発生が懸念されるイネばか苗病とその対応策について紹介頂いた。ペフラゾエートやイブコナゾールといった DMI 剤は高い防除効果が保たれているものの、原原種栽培から一般栽培の各段階での連用をさけるため新規薬剤の創出が求められた。また、「環境創造型農業（人と環境にやさしい農業）」の推進を図る上で温湯消毒より効果的でかつ化学合成農薬に依存しないタイプの種子消毒法の開発にも期待を寄せられた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、講演者の方々および多数の質問をお寄せ頂いた参加者の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。また、アンケートも多数お寄せ頂き感謝申し上げます。より良いシンポジウムとするべく今後の参考にさせて頂きたい。次回も多数の皆様の積極的なご参加をお願いしたい。



写真：講演者の方々の発表の様子
（上段：左から井田様、山本様、中段：左から遠様、谷口様、下段：左から宮野様、渡辺様、松本様）

以上

【今後の学会活動の予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日時：令和4年10月13～14日

場所：北海道大学農学部（ハイブリッド形式）

(2) 東北部会

日時：令和4年9月27～28日

場所：コラッセふくしま（福島市）

(3) 関東部会

日時：令和4年9月15～16日

場所：Web開催（オンライン）

(4) 関西部会

日時：令和4年9月21～22日

場所：高知会館（高知市）

(5) 九州部会

日時：令和4年11月16～17日

場所：鹿児島大学（鹿児島市）

2. 談話会・研究会等

(1) 第16回植物病害診断教育プログラム

日程：令和4年8月22～26日

場所：秋田県立大学生物資源科学部

(2) 第56回植物感染生理談話会

日程：令和4年9月5～7日

場所：東北大学青葉山新キャンパス 青葉山コモンズ

(3) EBC(Evidence-based Control)研究会ワークショップ 2022

日程：令和4年9月12日

場所：オンライン開催

(4) 第 21 回植物病原菌類談話会

日程：令和 4 年 9 月 17 日

場所：オンライン開催

(5) 土壌伝染病談話会

日程：令和 4 年 11 月 11 日

場所：ウェビナー（オンライン）千葉大学

【関連学会情報】

オンライン配信

第 37 回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン2022』のご案内

——深まる困難な状況下で持続的農業を支えるイノベーションな植物保護——

趣 旨：報農会シンポジウムでは、植物防疫における当会独自の立場を生かしテーマ設定を行ってきました。この数年は困難の度合いが深まり続ける自然及び社会・経済の状況から、「今後の植物保護の根幹には IPM をおかざるをえない」という考えを基本においてきました。

今般、世界はコロナ禍が終息をみない中、ありえない戦禍の発生という未曾有の事態が加わり、人類の諸活動がますます制約を受けています。しかし、かような時であればなおさらのこと、人の生命維持に不可欠な農業生産は死守されなければならない、それをサポートする植物防疫の重要性がますます高まっています。

IPM はすでに実効性を獲得しつつあるものの、まだ道半ばにあります。人類にとって持続可能な農業の重要性がこれまでになく高まってきたことは、昨年 5 月に農林水産省から公表された「みどりの食料システム戦略」の諸目標にもはっきり現れています。生産力の向上と持続性の両立を実現する鍵として、植物保護においても IPM を中心に革新的な技術開発が求められることは言うまでもありません。今回のシンポジウムでは IPM の実現をいっそう喫緊の課題と捉え、様々な角度から講演いただくことを企画しました。

コロナ禍が依然として先行きの見えない状況にあるため、本年のシンポジウムも昨年同様オンラインで開催する準備を進めているところです。ご不便をおかけしますが、ご理解のうえ多くの皆様にご参加いただきますようお願いいたします。

主 催：公益財団法人 報農会

協 賛：一般社団法人日本応用動物昆虫学会、一般社団法人

人日本植物病理学会、日本農薬学会、一般社団法人日本雑草学会

日 時：令和 4 年 9 月 28 日（水）10:00～16:00（オンラインによるライブ配信）

＜プログラム＞

開 会：10:00～10:10

挨拶

報農会理事長 田付貞洋

講 演：10:10～11:00

バイオスティミュラント：EU と米国、日本でのステータス

日本バイオスティミュラント協議会 和田哲夫

11:00～11:50

サツマイモ基腐病の発生と防除

農研機構九州沖縄農業研究センター暖地畑作物野菜研究領域 小林有紀

11:50～13:00

休 憩

13:00～13:50

環境配慮型水田における農薬の施用と管理

滋賀県立大学環境科学部 須戸 幹

13:50～14:40

農業における水利用を通じて水田に侵入する水草たち

農研機構農村工学研究部門施設工学研究領域 嶺田拓也

14:40～15:30

震災復興を目指す「一社・雄勝花物語」と北限のオリーブ栽培

（一社）雄勝花物語共同代表 徳水博志

15:30～16:00

総合討論

参加費：3,000 円（講演要旨集を含む。ただし、講演要旨集のみ購入の場合 2,000 円）

申込み：報農会ホームページに掲載しております『開催要領』をご覧くださいの上、申込用紙に必要事項を記入して、メール又は FAX でお申し込みください。

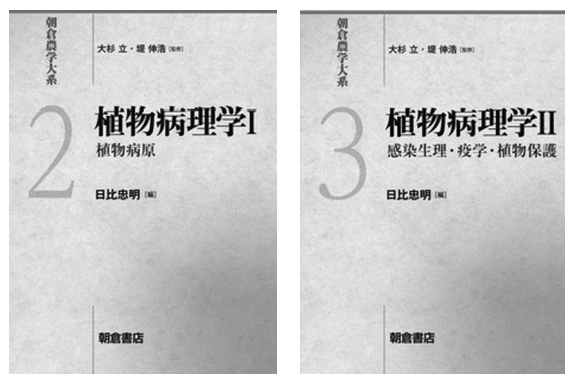
なお、シンポジウム終了後同じ URL で、報農会主催の第 37 回功績者表彰式をオンラインで行います。お時間の許す方は是非ご覧ください（16:15～16:45 功績者表彰式）。

連絡先：公益財団法人報農会 事務局

TEL/FAX：042-452-7773

E-mail：khono511@car.ocn.ne.jp URL：https://honokai.org

【書評】



(朝倉農学大系) 第2巻『植物病理学I』(A5判 336頁, 本体 6000円), 第3巻『植物病理学II』(A5判 256頁, 本体 4500円) [いずれも日比忠明編, 2022年5月, 朝倉書店]

植物病理学は, 地上のあらゆる有用植物を対象として, それらの病気による被害を防ぐことによって, 農業生産の安定と生態環境の保全に寄与することを目的とした基礎と応用の科学であり, 農学の基礎的・中心的な科目のひとつである。

今日まで各時代それぞれに各種の専門書や教科書が出版され植物病理科学の歩みが記されてきたが, この度, 日比忠明先生(東京大学名誉教授)の編集・執筆, 瀧川雄一先生(静岡大学大学院教授), 大島研郎先生(法政大学教授)および有江力先生(東京農工大学大学院教授)の分担執筆により, これまでの成果を踏まえ基礎から最先端までの充実した内容が解説された, スタンダードかつ骨太な教科書が出版された。

本書は, 朝倉農学大系の第2巻および第3巻としてそれぞれ「植物病理学I 植物病原」(本文1~271頁)および「植物病理学II 感染生理・疫学・植物保護」(本文283~489頁)の分冊となっている。本書の特色は, 総合科学分野である広範な植物病理学全体を構成する個々の専門分野を植物病原学, 植物感染生理学, 植物疫学, 植物保護学の4分野に分け, 分冊することで十分な頁数を確保して, 分野ごとに基本的事項から最新の成果に至るまでの多くの情報の概要が簡潔・明瞭に記述され, あわせて相互の関係が密接に示されている点である。

「植物病理学I」では, 第1章 序論, 第2章 植物病原学(植物病原体, ウイルスとウイロイド, 細菌とファイトプラズマ, 菌類, 線虫, 寄生藻類および寄生高等植物, 非伝染病, 貯蔵病害)について, 「植物病理学II」では, 第3章 植物感染生理学, 第4章 植物疫学, 第5章 植物保護学, および第6章 主要植物病害一覧について, 学際領域を含む最先端の重要な研究動向等の詳細な情報も含めて

記されている。特に, 第2章の主要な病原であるウイルスとウイロイド, 細菌とファイトプラズマおよび菌類, 第3章の植物感染生理学については詳述されており, 現在の基礎研究での主流をなす分子植物病理学的内容に多くのページが割かれている。第4章では植物病害の発生生態と発生子察, 第5章では病害の診断と防除に関する最新の技術情報が各々網羅されている。

各章の章末にはそれぞれに主要な著書や総説などの参考文献が多数示されており, 個々の事項に対応する原著論文に容易に辿り着けるよう配慮されている。

さらに, 我が国に発生する主要な植物病害については, 第6章に主要病害一覧として章立てされ, 食用作物, 特用作物, 牧草, 野菜, 果樹, 花卉・花木, 樹木, 熱帯作物, 貯蔵病害に区分けして, 植物名, 病名, 病原の種別, 病原名, 病徴と伝染様式, 防除法の概要が簡潔な一覧表にまとめられている。併せて日本植物病名目録や病徴写真が載る日本植物病害大事典をはじめ各種専門書の参考文献および参照ウェブサイトの情報網も示されており実用的である。

各巻には, I, II巻共通(各巻に含まれるページは太字記入)の33頁に及ぶ充実した索引が配されている。特に, 事項和文および事項欧文の索引数は多数リストアップされ, また植物病名, 植物病原体(和名)および植物病原体(学名)も網羅されており, 両巻を統合した植物病理学事典としての機能も備えている。

我が国の大学院教育の一層の充実化が求められる中, 植物病理学を探求する若い学徒に対して, 基礎から最先端の学術情報を詳細に提供する教科書が必須である。編者によると, 本書は主として読者対象を学部学生よりはむしろマスター以上の院生や若手研究者におき, 自身の研究テーマを推進する上で必要な基礎的・専門的知識や最新の研究成果並びに研究動向を示し, さらに関連の総説文献を通して最新の原著論文に至るまでの道案内となるように意図されているとのことである。確かに, 学部に入ったときに手に取り, 読みこなしながら勉強し, 大学院生, 研究者になった後も常時手元において参照できる充実したコアの情報が記載され息の長い教科書として構成されていると思う。次代を担う学生・院生・研究者・技術者の方々にとって大いに有用な成書であると確信する。大学をはじめとして植物病理学に関わる全ての教育・研究機関には是非備えておきたい本格的な学術図書である。

本書を編集・執筆された日比忠明先生はじめ執筆に携われた先生方の周到な構成企画と学際領域を含む膨大な情報を精力的に纏められたご尽力にこころから敬意を表します。

(神戸大学名誉教授 眞山滋志)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、大里修一、宮田伸一、宮本拓也、藤川貴史

編集後記

学会ニュース第99号をお届けします。本号は、今年度推薦された名誉会員と永年会員のご紹介、今後の学会活動の予定などの記事を掲載しました。

新しく2名の方が名誉会員に、4名の方が永年会員に選ばれました。学会への多大なご貢献に深く感謝申し上げますとともに、長年にわたる精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

また、年末までの学会活動の主な予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など多くの集いについて、対面開催の予定が増えてきております。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。
(門田育生)
